

二〇一二年 度

全統高一記述模試問題

国語（100分）

二〇一三年一月実施

試験開始の合図があるまで、この「問題」冊子を開かず、左記の注意事項をよく読むこと。

注 意 事 項

- 一、この「問題」冊子は、22ページである。
- 二、解答用紙は別冊子になっている。（「受験届・解答用紙」冊子表紙の注意事項を熟読すること。）
- 三、本冊子に脱落や印刷不鮮明の箇所及び解答用紙の汚れ等があれば試験監督者に申し出ること。
- 四、試験開始の合図で「受験届・解答用紙」冊子の国語の解答用紙を切り離し、所定欄に氏名（漢字及びフリガナ）、在学高校名、クラス名、出席番号、受験番号（受験票発行の場合のみ）を明確に記入すること。
- 五、試験終了の合図で右記四、の 〇の箇所を再度確認すること。
- 六、答案は試験監督者の指示に従って提出すること。

| | | | |
|------|--|------|--|
| クラス | | 受験番号 | |
| 出席番号 | | 氏 名 | |

□ 次の記事を読んで、後の問に答えよ。(配点 六十点)

礼儀作法が人びとの行動を支配しているという意味で、都市はまさに一つの巨大な社交場だと見なすことができる。そしてその周辺に広がる秩序の影響圏は、言葉の厳密な意味で社交界になぞらえることができる。それはおりあればいつでも社交場に登場し、礼儀作法の規制に服すべく身構えている人びとの世界であり、共通の演技に向けて訓練された人びとのつながりである。政治の一面はまさにこうしたつながりをつくるアルスなのであって、そのかぎりでは政治とは社交の別の名だといっても過言ではないだろう。じつさい政治家はさまざまな次元でサロンの女主人に似ているし、職業的なホスト、ヴァンサン・ヴォワチュールの発揮した才能を要求される。彼らはまず仲間の政治家のあいだで社交家でなければならず、民衆には作法の模範演技を見せる役者でなければならず、さらに民衆自身が登場する祭りの演出家となり、そのために都市という舞台をつくる装置家にもなるのである。

甲 けれど政治の一面が社交そのものだということは、政治が人間の営みとして無目的ではないまでも、目的を言葉で限定することがきわめて難しいことに由来している。経済の目的が富の増大であるとか、科学の目的が真理の追究であるといったかたちで、政治の目的をひと言で表すことは不可能である。政治が人間集団の秩序をつくるアルスであるのは確かだろうが、その秩序の観念はあまりにも多義的だからである。現に政治の理想はさまざまに語られてきたが、それぞれの歴史的條件をカンジョウに入れればすべては相対的でしかなかった。結局、政治は人間がただ集まって暮らすための知恵だというほかはないが、これはなんとジンメル^⑤のあの「純粋な社会化作用」、いいかえれば社交の原理そのものに似ていることだろう。いうまでもなく完全に没理想の政治はありえないが、過度に理想主義的な政治が¹つねに失敗するのは、たぶん政治が一面で社交だという真実を忘れたことの報いなのである。

ところでこのさいとくに注意しておかねばならないのは、ここという都市の礼儀作法がただの風俗ではなく、広く家庭や村にもある慣習一般とは違うということである。もちろん生活慣習は集団統合の一つの重要な絆^{きずな}であって、とりわけ情緒的な次

元で人びとの強い紐帯ちゅうたいとなることは疑いない。むしろ通常、集団形成の原理として法や契約と対置され、^(註) テンニースの言う「ゲマインシャフト」をつなぐものと考えられているのは生活慣習であろう。しかも、礼儀作法もよく機能するためには人の身につかなければならず、半ば慣習化されねばならないのであるから問題²は微妙だといえる。しかしあくまでも明らかでないのは、生活慣習が同質の集団のなかでのみ共有されるのにたいして、礼儀作法は本来は異質な人びとのあいだで分け持たれるという点である。慣習はおもに家庭や村のなかで育まれるが、礼儀作法はとくに都市でこそツチカちかれるということである。

別の言いかたをすれば、生活慣習の習得がより無意識に行われるのにたいして、礼儀作法の順守は意識的な学習に始まるという特色を持つ。また慣習はいったん身につけばほとんど生理的な機能となり、老化のような肉体的変化がなければ、おおむね衰退するということはない。さらに慣習はアルスにまつわる価値の観念とも無縁であって、毎日の慣習的行動についてその上手下手が問われることはない。たとえば二足歩行の慣習は幼児期に努力の意識なく習得され、その後は杖つえを突くまでは衰えることがなく、多少の癖があつてもとくに咎とがめられることはない。ところがそこにいったん礼儀作法の観点が導入され、儀式的に美しく歩くという課題が生じたとともに、事情は一変するのが明らかだろう。美しい一挙 x 一投 y は入念に学習し、日々に繰り返し練習し、ようやく人の笑いを買わない動作として保持することができるのである。

そしてその努力は言葉やしぐさの能力についても、化粧や衣装の工夫についても、いわんや祭りの行列の足どりや身振りについても求められる。そういう行動はもはやただ繰り返される行動ではなく、他人によって上手下手を問われ、アルスとしての価値評価を下される行動に変わっている。そうした行動は社会のなかに自他関係が成立し、見る人と見られる人の緊張関係が存在することを前提とした行動なのである。もちろん原初的な自他関係は家族にも村にもあるし、見せることを意識した行動がそこで芽生えることもあるだろう。しかし一般にあまりにも親密で日常的な人間関係のなかでは、人間の行動は見られることの緊張を失い、結果としてかく情性的な反復に陥りやすい。俗にいう生活慣習とはじつはそのようにして情性化された行動の型であり、いわば無意識化され、形骸化けいがいされたアルスの集積だと定義することができよう。

そしてそう考えると、さまざまな異質の生活慣習がソウグウする都市の空間は、その衝突によって慣習をあらためて意識化

し、惰性的な行動をアルスとして賦活^{ふかつ}する場所だと見ることができ。そこでは多くの慣習が他の慣習に吸収されて消失するが、いくつかの慣習はそれを知らない人びとによって学習され、その過程で学べき価値として意識化される。学習はしばしば誤解や過剰適合によって当の慣習を變形するが、そのこと自体が新しいアルスの創造に発展もする。さらにいったん慣習が意識的につくれることを覚えた都市民は、やがてつぎに創作された慣習といふべき流行を生みだして行く。そうした創作を先導する個人が現れ、それを支持する先駆的な集団が成立すると、そのサロンのなかから規範化された礼儀作法が誕生するのである。

このことは裏返していえば、礼儀作法が生活慣習よりも容易に転移され、広い地域に拡散することが可能だということを意味している。都市の礼儀作法はすでにその成立の過程で切磋琢磨^{せつさくさくま}を受け、異質者を教化し、異質者によって学ばれてきた文化であった。そういう文化は容易に都市外の住民を教化し、国家と重なりあうような広域を支配し、ときに国境の外にまで普及するのが当然だろう。ここで文化の本質論に深入りする余裕はないが、これまでの考察から言えることは、文化には普及力の異なる二つの明瞭な層があるということである。^d ツウゾク化された文化相対主義の主張に反して、文化には否^{いな}みがたい強弱、優劣の区別があるといいかえてもよい。少なくとも政治との関連において、共同体の慣習としての文化はまったく無力であるのに、都市で意識化された文化はにわか^ちに権力にヒツテキ^eする統合力をおびるのである。

(山崎正和『社交する人間』)

(注) ○アルス……技法。わざ。

○サロン……ヨーロッパ(特にフランス)で、上流階級の婦人が邸宅の客間で開いた社交的な集まり。

○ホスト……客をもてなす者。

○ヴァンサン・ヴォワチュール……フランスの作家(一五九七―一六四八)。

○ジンメル……ドイツの哲学者・社会学者(一八五八―一九一八)。

○テンニース……ドイツの社会学者(一八五五―一九三六)。

○ゲメインシャフト……地縁や血縁などによって結びついた自然発生的な社会集団。村落や家族などがその典型である。

問一 傍線部 a i e のカタカナを漢字に改めよ（楷書で正確に書くこと）。

問二 波線部 甲・乙の意味として最も適当なものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

| | | | |
|--------|--------|--------|-------|
| 甲 | | 乙 | |
| けだし | ア 要するに | にわか | ア 偶然に |
| ウ 思うに | イ よって | ウ 即座に | イ 強力に |
| エ そもそも | | エ 一方的に | |
| オ じつは | | オ 一時的に | |

問三 空欄 x y を補うのに最も適当な、身体の部位を表す漢字一字をそれぞれ答えよ。

問四 傍線部 1 「過度に理想主義的な政治がつねに失敗する」とあるが、それはなぜだというのか。七十字以内（句読点や記号も字数を含む）で説明せよ。

問五 傍線部2「問題は微妙だ」とあるが、これはどういうことを言ったものか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 意識的な学習に始まる礼儀作法も、生活慣習のように無意識的に行われるほどになれば機能しないため、礼儀作法と生活慣習には区別しがたいところがあるということ。

イ ある慣習が生活慣習なのか礼儀作法なのかという問題は、その慣習がどのような集団に共有されているのかがはっきりしないと、判断することが難しいということ。

ウ 礼儀作法は慣習として定着しないかぎり健全に機能しないが、それが伝統的な生活慣習よりも強い集団統合のはたらしを備えているかどうかは、断言しがたいということ。

エ 礼儀作法は法や契約にもとづいたものだが、生活慣習はむしろそれらと対立するものであるため、両者のどちらを集団統合の原理と見なすかという問題には、複雑な事情がともなうということ。

オ 無意識的に身につけられた慣習にならなければ機能しない礼儀作法と、集団を統合するものとしてつねに機能している生活慣習とを、識別するのは容易ではないということ。

問六 傍線部3「政治との関連において、共同体の慣習としての文化はまったく無力である」とあるが、それはなぜだというのか。九十字以内（句読点や記号も字数に含む）で説明せよ。

問七 筆者の考えと合致するものを、次の中から二つ選び、記号で答えよ。

ア 政治とは社交の別名であり、有能な政治家になるためには、サロンの主人や演出家など、多様な職能を獲得していくことが求められる。

イ 政治には社交としての一面がふくまれているため、それは都市に生きる人びとを情緒的な次元で強く結びつけるという機能をもっている。

ウ 祭りの行列のような儀礼の場だけでなく、ごく日常的な行動の次元においても、他人に笑われないような動作を保持する努力は必要である。

エ 都市においては、既存の礼儀作法は変質せざるをえないため、異質な礼儀作法どうしが齟齬^{そご}をきたし、それらはやがて相互作用を生むこととなる。

オ 礼儀作法とは都市的な空間に生きる人びとを支配するものだが、さかのばればそれが単なる流行のようなものに端を発しているということも珍しくない。

カ 都市的な空間を一つの社交場ととらえる見方は、文化がなぜ広域へと伝播^{でんぱ}していくのかといった問題を考察するうえで、大きな示唆を与えてくれる。

国語の問題は次の頁へ続く。

〔二〕 次の文章は、物理学者で東大教授であった寺田寅彦の「切符の缺穴」(大正十一年)である。なお、かつて電車などでは、同じ切符をくり返し使うといった不正乗車を防ぐため、車掌が切符に缺(パンチ)で穴をあけていた。これを読んで、後の問に答えよ。(配点 五十点)

日比谷止まりの電車が帝劇の前で止まった。前の方の線路を見るとそこから日比谷まで十数台も続いて停車している。乗客はゾロゾロ下り始めたが、私はゆっくり腰をかけていた。すると私の眼の前で車掌が乗客の一人と何かしら押問答を始めた。切符の缺穴がちがつているというのである。

この乗客は三十前後の色の白い立派な男である。パナマらしい帽子にアルパカの上衣を着て細身のステッキをさげている。小さな声で穏やかに何か云っていたが、結局別に新しい切符を出して車掌に渡そうとした。

二人の車掌が詰め寄るような勢いを示して声高にものを云っていた。「誤魔化そうと思ったんですか、そうじゃないですか。サア、どっちですか、ハッキリ云って下さい。」

若い男は存外顔色も変えないで、静かに伏目がちに何か云いながら、新しい切符を差し出していた。車掌はそれを受取るうともしないで

「サア、どっちです。……車掌は馬鹿じゃありませんよ」と罵った。

私は何だか不愉快であつたからすぐに立つて車を下りた。

あの若い立派な男がわずかに一枚の切符のために自分の魂を売ろうとは私には思いにくかった。しかしそれはどうだか分らない事である。

それにしても私はこの場面における車掌の態度をはなだしく不愉快に感じた。たとえ相手の乗客が不正行為をあえてしたという証拠らしいものがよほどまでに具備していたにしても、人の弱点を捕えて勝ち誇つたような驕慢な態度は醜い厭な感じしか傍観している私には与えなかった。ましてそれが万一反正でなくて何かの誤謬か過失から起つた事であつたら果し

てどうであろう。もしも時代と場所がちがっていて、人が自分の生命に賭けても Honour¹ を守るような場合であつたらこれはただではすみそうもない。

こんな事を考えて暑い日の暑苦しい心持^{こころもち}をさらに増したのであつた。

それから四、五日経つての事である。私はZ町まで用があつて日盛り^{ひざか}の時刻に出掛けて行つた。H町で乗つた電車はほとんどが明きのように空^すいていた。五十銭札を出して往復を二枚買つた。そしてパンチを入れた分を割^きき取つて左手の指先でつまんだままで乗つて行つた。乗つて行くうちに、その朝やりかけていた仕事のつづきを考えはじめて、頭の中はやがてそれでいっぱいになった。そういう時に私の悪い癖で、何かしら手に持っているものを無意識にいじる、この時は左の手の指先で切符の缺穴のところをやはり無意識にいじつていたのである。これはどういう訳だか分らないが、例えば暗算をやる時に無意識に指先をふるわしているといくらか似た事かもしれない。

Z町の停留場で下りようとして切符を渡すと、それをあらためた車掌が、さらにもう一つパンチを入れてそれと見較^{くら}べて「これはちがいます、私のよりは穴が大きい」と云つた。私は当惑した。「でも、さつき君が自分で切つたばかりではないか。」こんな証拠にもならない事を云つてみた。

切り立ての缺穴は円形から直角の扇形^{セクトル}を取りのけた格好をしている。私の指先でもみ捻^{ひね}げられた穴にもその形の痕跡^{こんせき}だけはちゃんと残っているが、穴の直径が二、三割くらいは大きくなって、穴の周辺が毛^けば立ち汚^だれている。

もう一人の車掌もやつて来て、同じ切符にもう一つ穴をあけた。「私のはこれですからね」と云つて私の眼の前にそれを突きつけた。三つの穴が私を脅^{おそ}かすように見えた。

代りの切符をもう一枚出して下ろしてもらつた方が簡単だとは思つた。が、その時の私の腹の虫の居所がよほど悪かつたと見えて、どうもそういうあつさりした気になれなかつた。別の切符を出すのはつまり自分の無実の罪を承認する事になるような気がしたので、私はそのまま黙つて車を下りてしまつた。車掌は踏台から乗り出すようにして、ちよつと首をかしげて右の手でものを捧げるような手つきをしながら「もう一枚頂きましょう」と云つてニヤニヤした。

下り立った街路からの暑い反射光の影響もあったろうし、朝からの胃や頭の工合ぐあいの効果もあったかもしれないが、とにかくこの車掌の特殊な笑顔を見た時に私の全身の血が一時に頭の方へ駆け上るような気がした。そして思い返す間のないうちに「それじゃあ、交番へ来てくれたまえ」とついこんな事を云ってしまった。交番はすぐ眼の前にあった。公平な第三者をかりなければ御互いの水掛論aではとても始末が着かないと思ったのである。車掌は「エエ、参りますよ、参りますとも、いくらでも参りますよ」とそう云って私について来た。

警官は私等二人の簡単な陳述を聞いているうちに、交番に電話がかかって来た。警官はそれを聞きながら白墨はくぼくで腰掛のようなどころへ何か書き止めていた。なかなか忙しそうである。私は少し気の毒になって来た。

警官は電車を待たさないために車掌の姓名を自署じしよさしてすぐに帰した。それから私に「貴方御いそぎですか」と聞いた。私はこの警官に対して何となくいい感じを懐いだくと同時に自分2の軽率な行為を恥はづかしめる心こころがかなり強く起った。

ここで自白しなければならぬ事は、私等が交番へはいると同時に、私は墓口がぐちの中から自分の公用の名刺を出して警官に差出した事である。事柄の落着を出来るだけ速やかにするにはその方がいいと思つてした事ではあるが、後で考えてみると、これは愚かなそして卑怯ひきょうな事に相違ちがひなかつた。そしてこの上もない恥曝はきばくしな所行であつたが、それだけ私の頭が均衡を失つていたという証拠にはなる。

警官の話によるとこの頃電車では缺穴の検査を特に嚴重にしているらしいという事である。そして車掌の方では缺穴ばかりを注目するのだから止むを得ないというのである。そう云われてみると私は一言もない。

そのうちに電車監督らしい人が来た。こういう事に馴なれ切つていらしい監督はきわめて愛想よく事件を処理した。「決して御客様方の人格を疑うような訳ではありませんが、これも職務で御座いますからどうか悪しからず」と云う。こう云われてみると私はますます弱つてしまふのであつた。私は恐縮して監督と警官とに丁寧ていねいに挨拶して急いでそこを立去つた。別の切符は結局渡さなかつたのである。

仕合せな事には、こういう場合に必然な人ばかりは少しもしなかつた。それで私が今こんな事を書かなければ、私のこの過

失は関係者の外には伝わらないで済むかもしれない。

私は自分の落度おちどを度外視して忠実な車掌を責めるような気もなければ、電氣局でんききょくに不平を持ち込もうというような考えもと
よりない。

しかしこの自身のつまらぬ失敗は他人の参考になるかもしれない、少なくとも私のように切符の缺穴をいじって拡げるような
悪い癖のある人には参考になる。同時にまた電氣局や車掌達にとつても、そういう厄介な癖を持った乗客が存在するという事
実を知らせるだけの役には立つと思う。

ついでながら、切り立ての缺穴の縁辺は截然さつぜんとして角立かどだっているが、揉もんで拡がった穴の周囲は毛端立けばだってばやけあるいは
捲めくれて、多少の手垢てあかや脂汗あぶらあせに汚れている。それでも多くの場合に原形の跡形だけは止とどめている。それでもしこのように揉ん
だ痕跡があつて、しかも穴の大きさが新しい穴と同じであつたら、それはかえつてもとの穴がちがった缺うがによつて穿たれたも
のだという証拠になる。

私はそういう変形した缺穴の「標本」を電氣局で蒐集しゅうしゅうして、何かの機会に車掌達の参考に見せるのもいいかもしれないと思
う。何なら虫眼鏡で一遍ずつ覗のぞかせるのもいいかもしれない。ついでにもう一步を進めるならば、電車の切符について起り得
る錯誤のあらゆる場合を調査しておくのもいいかと思う。不正な動機から起るものの外に、どれだけ色々の場合があるかを研
究し列挙して車掌達の参考に教えておくのも悪くない。事柄が人の「顔」にかかる事であるから、このくらいの手を足すのも
悪くはあるまい。

車掌も乗客も全く事柄を物質的に考える事が出来れば簡単であるが、そこに人間としての感情がはいるからどうも事が六むか
しくなる。

物質だけを取扱とくう官衙くわんがとちがつて、単なる物質でない市民乗客といったようなものを相手にする電氣局は、乗客の感情まで
考えなければならず、そして局の仕事が市民に及ぼす精神的効果までも問題にしなければならぬから難儀であらう。

しかしこれは止やむを得ない事である。事柄は小さなやうでも電車切符の穴調べも遣り方によつては市民の頭の中に或あるもの

をつぎ込み、その中から或るものを取り去るような効果がないとは限らない。

3

例えばわれわれが毎日電車に乗る度に、私が日比谷で見たような場面を見せられるとしたらどうだろう。おそらくわれわれの「感情美」に対する感覚は日に日に麻痺（注）して行きそうである。

百千年の後に軽率な史家（注）が春秋の筆法を真似て、東京市民をニヒリスト（注）の思想に導いた責任者の一つとして電気局を数えるような事が全くないとは限らないような気がする。

十幾年前にフィンランドの都ヘルシングフォルスへ遊びに行った時に私を案内して歩いたあちらの人が、財布から白銅貨のような形をした切符を出して、車掌というものの居ない車掌台の箱に投げ込むのを見た。つまらない事だが、私が今でもこの国この都を想い出す時に起る何となく美しい快い感じには、この些細な事（注）もいくらかを寄与しているように思う。

諸国を旅してみてもいったん売った電車切符をまた取り戻すような国は稀（注）であった。それで私は国々で乗った電車切符を記念に集めて持ち帰る事が出来た。この妙な機会に私はこれで張り交ぜの屏風でも作って「人を盗賊と思わない国々」の美しい想い出にしようかと思っている。

（注） ○日比谷止まりの電車……当時、東京で運行されていた路面電車（市電）。切符の出改札は車掌が車内で行っていた。

○電気局……当時の路面電車を運営・管理していた部局。

○官衙……役所。官庁。

○春秋の筆法……厳しく批判をする書き方。間接的原因を結果に直接結びつけるような論法。

○ニヒリスト……虚無主義者。

○ヘルシングフォルス……ヘルシンキ。

問一 傍線部 a 「水掛論」、b 「度外視して」の意味として最も適当なものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

- | | | | |
|---|-----|---|-----------------------------------|
| a | 水掛論 | ア | 霧囲気に流された議論 |
| | | イ | 遠慮しあつて進展しない議論 |
| | ウ | | 緊迫した駆け引きのもとに進められる議論 |
| | エ | | 理屈を言いあつて解決しない議論 |
| | オ | | 誹謗 <small>ひぼう</small> 中傷がくり返される議論 |
-
- | | | | |
|---|-------|---|----------|
| b | 度外視して | ア | 反省して |
| | | イ | 不問にして |
| | ウ | | 十分顧慮に入れて |
| | エ | | 帳消しにして |
| | オ | | 前向きに考えて |

問二 傍線部 1 「Honour」は、「名譽、面目、体面」といった意味の英語である。この「Honour」に最も近い意味を比喩的に表現した漢字一字の語を、本文中から抜き出して答えよ。

問三 傍線部 2 「自分の軽率な行為を恥じる心はかなり強く起った」とあるが、それはどういうことか。九十字以内（句読点や記号も字数に含む）で説明せよ。

問四 傍線部3「例えばわれわれが……麻痺して行きそうである」とあるが、ここで筆者はどのようなことを言っているのか。七十字以内（句読点や記号も字数に含む）で説明せよ。

問五 本文の筆者についての説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 相手の犯した罪を徹底的に糾弾する日本人の態度と、相手の犯した罪に対して寛大な態度をとる西欧人とを比べることとで、日本的な「感情美」と西欧的なそれとの違いについて考察している。

イ 自分が不愉快な場面に出会ったことを糸口にして、科学的なものの見方を日常に応用することの可能性や、人間同士の関わり合いにおける感情の重要性といった問題について、思いをめぐらせている。

ウ 自らもつまらぬ失敗から不正乗車を疑われた経験をもつせいで、日比谷で車掌から詰問されていた男に対して同情したということ率直に述べ、さらにそうしたトラブルを避ける方法についても説明している。

エ 乗客の不正を疑い威圧的な態度をとる車掌と、愛想よく事件を処理する電車監督の対照的なあり方から、人を盗賊と
思う国とそうは思わない国のことを想起し、あらためて彼我の差を感じたということを綴っている。

オ 自分があらぬ疑いをかけられて無実の罪をきせられそうになった際に、物質に即した分析を行うことで問題の本質を
実証的に解明し、自分の無実を証明していった経緯を、平明な語り口で吐露している。

問六 本文の筆者の寺田寅彦は文学者としても有名であるが、彼の文学上の師は明治を代表する小説家で、『草枕』『三四郎』などの作品で知られている。その作家の筆名を漢字で答えよ。

国語の問題は次の頁へ続く。

三

次の文章は『義経記』の一節で、源頼朝（鎌倉殿）から源義経（判官）追討の命を受けた土佐坊正尊（土佐）が、夜陰に乗じて義経を襲撃したものの、義経の従者である武蔵坊弁慶らに反撃され、鞍馬山を目指して敗走した後の場面である。読んで、後の問に答えよ。（配点 五十点）

土佐は鞍馬をも追ひ出だされて、僧正が谷にぞ籠りける。大勢続いて攻めければ、鎧をば貴船の大明神に脱ぎて参らせ、ある大木の空洞にぞ逃げ入りける。弁慶・片岡は、土佐を失ひて、「何ともあれ、これを逃がしてはよき仰せはあるまじ」とて、此処彼処尋ね歩くほどに、喜三太向かひなる臥し木に上りて立ちたるが、「鷲尾殿の立ち給へる後ろの木の空洞の中に、物の動くやうなるこそ怪しけれ」と申せば、太刀打ち振りてつと寄る。

土佐これを見て、叶はじと思ひけん、木の空洞よりつと出でて、真下りに逃ぐる。弁慶喜びて、大手を拵げて、「憎い奴、何処まで」とて追つかく。聞こゆる足早なりければ、弁慶より三段ばかり先立つ。遥かなる谷の底にて、「片岡経春が、此処にて待つぞ。ただおこせよ」とぞ申しける。この声を聞きて、叶はじと思ひけん、岨をかい廻りて上りけるを、佐藤四郎兵衛が、大の雁股を差し矧げて、余すまじとて、下り矢先に小引きに引いて差し当てたり。土佐はさらば腹をも切らで、武蔵坊にのさのさとぞ捕られける。さて鞍馬へ具して行く。東光坊より大衆五十人付けてぞ送られける。

「土佐を具して参りて候ふ」と申しければ、大庭に引つ据ゑさせ、判官、佩楯小具足に、太刀佩いて、縁に出でさせ給ひて、「いかに正尊、起請は書くよりして験はあるものを。何しに書きたるぞ。生きて帰らんと言はば、帰さんずるはいかに」と仰せられければ、頭を地に着け、「狸々は血を惜しむ、犀は角を惜しむ、日本の武士は名を惜しむと申す事の候ふ。生きて帰る侍どもに面を見えて何にかし候ふべき。ただ御恩には疾く疾く首を召され候へ」とぞ申しける。

判官聞こし召して、「土佐は剛の者にてありけるや。さてこそ鎌倉殿も頼み給ふらめ。大事の囚人を斬るやらん。斬るまじきやらん。それ武蔵坊計らへ」と仰せられければ、武蔵坊、「大力を獄屋に籠めて、獄屋踏み破られて詮なし。やがて斬れ」とて、喜三太に尻綱取らせて、六条河原に引き出だし、駿河次郎斬手にてこそ斬らせけれ。土佐は四十三、同じく太郎は十九、

伊北五郎は三十三にて斬られけり。

(注)

- 鞍馬……現在の京都市北部にある鞍馬山のこと。中腹に鞍馬寺があり、幼い頃の義経がここで修行をした。
- 僧正が谷……鞍馬寺の北西約一キロメートルの所にある谷。
- 貴船……現在の京都市左京区鞍馬貴船町にある貴船神社。
- 喜三太……義経の従者の一人。
- 三段……約三十三メートル。
- 岨……山腹の険しい所。崖。
- 雁股……二股に分かれて内側に刃をつけた鐵ヤジリ。
- 差し矧きりげて……矢を弓につがえて。
- 下り矢先……矢先を下げてかまえること。
- 差し当てたり……ねらいをつけた。
- のさのさと……平然と。
- 東光坊……鞍馬寺の境内にある僧たちの住居。
- 佩楯小具足……鎧を着けない武装姿。
- 起請……神仏に誓って偽りのないことを記した文書。土佐坊正尊は、源義経から自分を追討しに來たのではないかと問い詰められた際に、無実の証を立てる文書を記している。
- 狸々……中国における想像上の怪獣。
- 御恩……自分に対するお情け。
- 尻綱……罪人の後ろに付ける綱。
- 太郎……土佐坊正尊の嫡男。
- 伊北五郎……土佐坊正尊の従兄弟。

問一 傍線部1「これを逃がしてはよき仰せはあるまじ」とあるが、どういうことか。四十字以内（句読点等を含む）で具体的に説明せよ。

問二 傍線部2・4「叶はじと思ひけん」は、作者が土佐坊正尊の心中を推測したものだが、作者は土佐坊がなぜ「叶はじ」と思ったと考えたのか。それぞれ簡潔に説明せよ。

問三 傍線部3「聞こゆる」、5「具して」、7「やがて」を現代語訳せよ。

問四 傍線部6「土佐は剛の者にてありけるや。さてこそ鎌倉殿も頼み給ふらめ」とあるが、源義経は土佐坊正尊のどのような点を、このように評価しているのか。六十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問五 本文中の空欄に入る助動詞として最もふさわしいものを、適当な形に活用させて記せ。

国語の問題は次の頁へ続く。

四 次の文章を読んで、後の問に答えよ。(設問の都合で、返り点・送り仮名を省いたところがある。)(配点 四十点)

宋 守 約 為^{たり}殿^{でん}帥^{すい}自^a入^ル夏^ニ日^ニ輪^{りん}軍^{シテ}校 十 数 輩^ニ捕^{ヘシ}蟬^{セム}、不^ラレ

使^メ得^レ聞^{クラ}声^ヲ。有^{ラバ}鳴^ク於^ニ前^ニ者^{こと}、皆 重^ク答^む之^ヲ。人 頗^{すこぶ}不^レ堪^{たへ}。故 言 守 約

惡 聞 蟬 声。神 宗 一 日 以^テ問^フ守 約^ニ曰^{ハク}、「然^{リト}」上 以^テ為^ス過^{あやまち}。守 約

曰^{ハク}、「臣^ニ豈^ニ不^{ラン}知^ラ此^ノ非^{ザル}理^ニ。但^ダ軍 中^ハ以^テ号 令^ヲ為^ス先^ト。臣 承 平^ニ總^ス兵

殿^{でん}陛^{べい}無^シ所^レ信^{トスル}其^ノ号 令^ヲ。故 寓^{ぐうスル}以^テ捕^{フル}蟬^ヲ耳^ニ。蟬^ノ鳴 固^{クハ}難^{もとヨリ}禁^シ。而^{ルニ}臣

能 使^ニ必 去^{。c}。若 陛 下 誤^{リテ}令^{メバ}守^ニ一 障^ヲ、臣 庶^ち幾^{かカ}或^{イハ}可^{キニ}使^フ人^ヲ」上 以^テ

為^ス然^{リト}。

(『石林燕語』による)

(注) ○宋守約……人名。北宋の武将。 ○殿帥……宮中を守る軍の司令官。 ○輪……輪番にする。交代にする。

○軍校……軍の将校。 ○神宗……北宋の第六代皇帝(在位一〇六八—一〇八五)。

○上……皇帝。ここでは神宗を指す。 ○承平総兵殿陛……太平の世に司令官を務める。

○信^ニ其号令……自分の命令を徹底させる。　○寓……かこつける。　○守^ニ一障……一つの砦^{とりで}を守備する。
○庶幾……「きつとりでしょう」という意の推量表現。

問一 傍線部 a 「自」・ b 「耳」・ c 「若」の読みを、送り仮名も含めて全て平仮名で記せ。

問二 傍線部 1 「故言 守約 惡聞 蟬声」は、「故に守約蟬の声を聞くを惡むと言ふ」と読む。この読み方に従って、解答欄の原文に返り点を施せ。（送り仮名は不要。）

問三 傍線部 2 「臣 豈 不^レ知^ニ此 非^レ理」を、平易な現代語に訳せ。

問四 傍線部 3 「蟬 鳴 固 難^レ禁」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 蟬の鳴き声を聞くと必ず嫌悪感を抱いてしまうということ。
イ 蟬はたとえ捕らえられてもしばらく鳴き続けるということ。
ウ 蟬が鳴かないようにすることなどできはしないということ。
エ 鳴く蟬をむやみに捕らえるのは実に愚かなことだということ。
オ 鳴く蟬を捕らえて逃がさないようにしても無理だということ。

問五 傍線部 4 「臣 能 使^ニ必 去」を、書き下し文に改めよ。

問六 宋守約が將校たちに蟬を捕らえさせた意図は何か。七十五字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

